

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H03078

研究課題名（和文）実践知を基盤とした「安楽」をもたらす包括的コンピテンシー・プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a comprehensive competency program to make patients 'Anraku' based on practical knowledge.

研究代表者

本城 由美（佐居由美）（HONJO, Yumi）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：10297070

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、看護師が患者に「安楽」をもたらすケアが実践できるよう、実践知を基盤とした包括的コンピテンシー・プログラムを開発することに取り組んだ。必要なコンピテンシー（能力）を明らかにするために、各看護分野の看護師にインタビューおよびアンケート調査を行った。その結果、コンピテンシーの基盤となる安楽なケアとして共通して実施されていたことは、「心身ともに苦痛を最小限に軽減する」「患者さんらしさや、主体性を尊重する」「患者さんを取り巻く環境を整える」等であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「安楽」は看護の基本原則である。だが、昨今の医療現場では、患者の「安全」確保が重要視されるあまり、患者の「安楽」が軽視されている感が否めない。人間の基本的欲求ともいわれる「安楽」がなおざりにされることは、患者の生活の質を脅かす。実践のために必要なコンピテンシープログラムのために、患者に「安楽」をもたらす看護師の実践知を明らかにすることは、看護師による患者への安楽なケア実践促進に寄与するという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study addressed the development of a comprehensive competency program based on practical knowledge to enable nurses to practice care that make patients Anraku. Interviews and questionnaires were conducted with nurses in various nursing disciplines to identify the required competencies. The results showed that what was implemented in all nursing disciplines as comfort care as the basis for competencies were: minimizing physical and mental suffering, respecting the patient's individuality and independence, and preparing the environment surrounding the patient.

研究分野：基礎看護学

キーワード：安楽 看護ケア インタビュー アンケート 熟練看護師 実践知

1. 研究開始当初の背景

「安楽」は看護の中心定理であり(看護学辞典,2006)「安全・自立」と共に看護の基本原則と説明されている(日本看護科学学会学術用語検討委員会,2011)。「安楽」は、「その人らしい生活の中で、身体的・精神的・社会的な苦痛や、不安、不満がなく、楽だと感じている状態」と定義される一方で、抽象的であると指摘される(佐居,2004a)。看護師が患者に「安楽」をもたらすケア(以下、「安楽」なケア)を示した研究に、内科系外科系成人病棟に勤務する熟練看護師が実践している「安楽」なケアをモデル化した研究がある(佐居,2012a)。だが、これらは、すべて内科および外科系成人病棟看護師を対象とした限定的な研究であり、看護実践のすべての領域を網羅したものでない。「安楽」なケアは、急性期や緩和ケアなど特定の病状において、在宅看護など場の異なりによって、小児や高齢者など発達段階に応じて、多様であると考えられるため、各看護領域における「安楽なケア」を明らかにする必要がある。各看護領域それぞれの「安楽」なケアには、どのような共通性があり、独自性があるのか。実践知の中の共通性と独自性が明確になれば、看護における「安楽」なケアの様相が明らかになり、看護師による患者への安楽なケアの実践は促進されるであろう。将来、看護実践を担う現在のデジタル世代の若者には、抽象的でなく具体的に示すことが不可欠である。抽象的な概念である「安楽」をもたらすケアを、看護師が患者に「安楽」をもたらすケアが実践できるよう、実践知を基盤とした具体的なコンピテンシー・プログラムを開発することは、喫緊の課題であり、教育および臨床での看護ケアの質の向上に寄与する。

2. 研究の目的

安楽の類似概念である“Comfort”は実践が体系化され、検証を経て理論化されている(Kolcaba, K. et al,1999; Dowd, T. et al, 2000.Kolcaba, 2003)。だが、日本における「安楽」は、看護の様々な領域を網羅したケアの体系化がされていない。本研究の学術的独自性は、日本の看護の中で独自に発展し、看護の中心定理である「安楽」を、各看護領域の熟練看護師から得た実践知を基盤として明らかにすることで、実践的なコンピテンシー・プログラム開発を目指すことである。

3. 研究の方法

[各領域の熟練看護師が実践する「安楽」なケア(インタビュー調査)]

各看護領域で卓越した看護実践を行っている熟練看護師(病棟看護管理者の推薦を得る)を対象に、専門領域の研究分担者/研究代表者が半構成的面接法にてデータ収集を行った。8つの看護領域(小児看護、精神看護、回復期看護、緩和ケア、母性看護、クリティカルケア、老年看護、在宅看護)の熟練看護師を対象とした。安楽に関する先行研究(佐居 2009)を参考にインタビューガイドを作成し、グラウンデッド・セオリー手法を用いて分析し、各看護領域の「安楽」なケアを明らかにし、モデル化を試みた。

[各領域の熟練看護師が実践する「安楽」なケア(質問紙調査)]

各看護領域の熟練看護師を対象とした安楽な看護実践についてのインタビューから得られた「安楽なケア」内容を検証し洗練させることを目的に、各看護臨床領域に勤務する看護師を対象にウェブアンケートを行った。

4. 研究成果

8つの看護領域(小児看護、精神看護、回復期看護、緩和ケア、母性看護、クリティカルケア、老年看護、在宅看護)のうち、クリティカルケア領域における安楽のケアについて述べる(他の領域は成果の公表のための手続き中)。クリティカルケア領域では、7年以上臨床経験のある熟練看護師8名にインタビューを行った。クリティカルケア領域の熟練看護師は、【患者の身体を観察により直接的に得られる指標】【患者から発せられる指標】【機器類より得られる指標】をもとに患者の安楽を判断し、安楽なケアの実践に至っていた。実践されていた安楽なケアは、【先を見据えた対応で苦痛を最小限にする】【避けられない苦痛を極力抑えて乗り越えられるよう整える】【非日常の中に安心できる時間をつくる】【真の気持ちに寄り添う】の4つのカテゴリーに分類することができた。集中治療による避けられない身体・心理的苦痛を前提とした中で、いかに苦痛を最小にし、最善に整えるかという視点がクリティカルケア領域における安楽なケア実践の特徴として示されていた。

その他、母性看護・周産期看護と在宅看護(例:安楽の定義・意義に関する認識が、“リラックスしている”等の日常を意識したものであるという特徴)精神看護と回復期リハビリ看護(例:安楽の定義・意義に関する認識が“ここちよい”“快適”等の患者の主観的満足を意識したものであるという特徴)では、それぞれにおける傾向の類似性があることが示唆された。また、小児看護においては安楽の定義・意義に関する認識が、“発達を促すこと”を意識したものであるという特徴が確認された。

加えて、各看護領域において、コンピテンシーの基盤となる安楽なケアとして共通して実施されていたことは、「心身ともに苦痛を最小限に軽減する」「患者さんらしさや、主体性を尊重する」「患者さんを取り巻く環境を整える」等であった。

また、実践知を基盤とした「安楽」をもたらす包括的コンピテンシー・プログラムの開発に向けて、各看護領域における安楽なケアについてのウェブアンケートを実施した。その結果、2,890件の回答が得られた。アンケートは、各看護領域の熟練看護師を対象とした安楽な看護実践についてのインタビューから得られた「安楽なケア」内容を検証し洗練させることを目的に実施した。熟練看護師が実践していた「安楽なケア」について、その同意度(実践している安楽なケアにどの程度あてはまるか)と実践度(どの程度実践しているか)について、5段階で回答を得た。各領域の分析の一部を下記に報告する。

回復期/リハビリテーション看護では、安楽なケアにどの程度あてはまるかについては、おおよそ同意が得られたと考える。それと比較して「安楽なケアをどの程度実践されているか」のパーセンテージは低い印象。身体的ケアよりも精神的ケアのパーセンテージが低く、インタビュー調査では、信頼関係を築くということが重要と考えていたが、本調査の結果からは同様の傾向ではなかったことが推察された。

母性看護領域では、一部のケアについては全体の7割が安楽なケアに当てはまると回答した。一方で、実践している程度は7~8割弱であり、“どちらともいえない”すなわち“実践できている”とまでは言えないとの回答が2割程度、認められた。

クリティカルケア領域では、「安楽なケア」の同意度について、身体的ケアと精神的ケアに分けて検討したところ、身体的ケア82.4%、精神的ケア81.9%であった。「安楽なケア」の実践度については、身体的ケア77.7%、精神的ケア69.6%であり、精神的ケアと比較して身体的ケアの方が、「安楽ケア」としての同意率も実践率も高い結果であった。

以上のように、アンケート結果では、熟練看護師へのインタビューから明らかになった各領域の安楽なケアについて、概ね同意を得られたと捉えることができた。インタビュー内容の妥当性が検証されたと考えることができる。一方で、ケア内容によっては、同意(あてはまる)が50~60%台の項目もあり、コンピテンシーとする項目を選定する際には、各看護領域の安楽なケア内容を洗練させるため、より一般化するため、80%以上の同意が得られた項目を採用する基準の設定等の必要性が示唆された。本分析結果等を踏まえ、包括的コンピテンシー・プログラムの開発に向けた成果の公表準備を各看護領域において継続中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西本 葵, 佐居 由美	4. 巻 19
2. 論文標題 クリティカルケア領域における熟練看護師が実践する「安楽」なケア	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本クリティカルケア看護学会誌	6. 最初と最後の頁 134-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11153/jaccn.19.0_134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nishimoto Aoi, Sakyo Yumi	4. 巻 19
2. 論文標題 Providence of “Anraku Care” by Proficient Nurses in Critical Care Unit	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japan Academy of Critical Care Nursing	6. 最初と最後の頁 134 ~ 143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11153/jaccn.19.0_134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐居 由美, 山田 雅子, 西本 葵, 安藤 和美, 桃井 雅子, 小高 恵実, 酒井 禎子, 相澤 達也
2. 発表標題 包括的安楽ケアモデルの構築にむけた取り組み～各看護領域の熟練看護師が実践する「安楽」なケア～
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会 交流集会5
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐居由美, 山田雅子, 西本葵, 安藤和美
2. 発表標題 在宅看護領域の熟練看護師が実践する安楽なケア
3. 学会等名 第27回聖路加看護学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐居由美
2. 発表標題 在宅看護師が認識・実践する「安楽」なケア -webアンケート調査結果報告-
3. 学会等名 第34回日本医学看護学教育学会学術学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小高恵実, 佐居由美, 安藤和美
2. 発表標題 精神科熟練看護師が実践する「安楽」なケア
3. 学会等名 日本精神保健看護学会 第31回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西本葵, 佐居由美
2. 発表標題 クリティカルケア領域の 熟練看護師が実践する「安楽なケア」の構造
3. 学会等名 第17回日本クリティカルケア看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相澤 達也, 酒井 禎子, 佐居 由美, 安藤 和美, 小高 恵実, 西本 葵, 桃井 雅子
2. 発表標題 緩和ケア領域の熟練看護師が実践する「安楽」なケア
3. 学会等名 日本緩和医療学会第3回関東・甲信越支部学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐居由美, 相澤 達也, 安藤 和美, 小高 恵実, 西本 葵, 桃井 雅子, 酒井 禎子
2. 発表標題 各看護領域の熟練看護師が実践する「安楽」なケアのモデル化 ~ 包括的安楽ケアモデルの構築にむけて ~
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会 交流集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 酒井 禎子, 相澤 達也, 佐居 由美, 安藤 和美, 小高 恵実, 西本 葵, 桃井 雅子
2. 発表標題 回復期看護において熟練看護師が実践する「安楽なケア」
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐居由美
2. 発表標題 臨床看護師が実践する「安楽」なケアの認識に関するアンケート調査
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐居由美
2. 発表標題 小児看護領域における安楽な看護ケア ある小児看護専門看護師の語りから
3. 学会等名 第25回聖路加看護学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安藤和美、佐居由美
2. 発表標題 小児看護領域の熟練看護師が実践する安楽なケア
3. 学会等名 日本小児看護学会第30回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 桃井雅子、佐居由美、瀧聖子
2. 発表標題 熟練看護師が実践する「安楽」なケア～母性看護領域の看護職者を対象としたインタビュー調査～
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐居由美
2. 発表標題 小児看護領域における安楽な看護ケア ～ある小児看護専門看護師の語りから～
3. 学会等名 第25回聖路加看護学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐居由美
2. 発表標題 集中治療看護領域の熟練看護師が実践する「安楽」なケアの様相
3. 学会等名 第30回日本医学看護学教育学会学術学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西本 葵 (NISHIMOTO Aoi) (10907653)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教 (32633)	
研究分担者	山田 雅子 (YAMADA Masako) (30459242)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (32633)	
研究分担者	中山 和弘 (NAKAYAMA Kazuhiro) (50222170)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (32633)	
研究分担者	酒井 禎子 (SAKAI Yoshiko) (60307121)	新潟県立看護大学・看護学部・准教授 (23101)	
研究分担者	小高 恵実 (KODAKA Megumi) (90275321)	上智大学・総合人間科学部・准教授 (32621)	
研究分担者	桃井 雅子 (MOMOI Masako) (90307124)	聖マリア学院大学・看護学部・教授 (37125)	
研究分担者	相澤 達也 (AIZAWA Tatsuya) (90794412)	新潟県立看護大学・看護学部・助教 (23101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------